

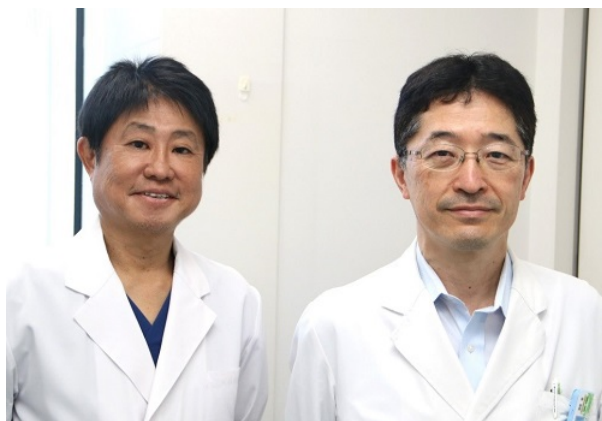
【東京】足立区に脊椎外科の専門病院を開院「リハビリ注力で入院中のサポートを厚くしたい」 - 森俊一・医療法人社団博豊会理事長らに聞く◆Vol.1

2023年5月26日（金）配信 m3.com地域版

「八王子脊椎外科クリニック」を運営する医療法人社団博豊会が2023年9月、東京都足立区に「東京脊椎病院」を開院する。78床のうち3分の1近くを回復期リハビリテーション病床が占めることが特徴。森俊一理事長はクリニックを運営するなかで感じてきた課題を踏まえ、「リハビリにも力を入れ、入院中のサポートを厚くしたい」と話す。

（2023年5月10日インタビュー、計2回連載の1回目）

▼第2回は[こちら](#)



森俊一理事長（左）と和田圭司院長

—まずは、八王子脊椎外科クリニックの特徴を教えてください。

森 当院は2013年、八王子駅から徒歩10分ほどの場所に開院した19床の有床クリニックで、脊椎・脊髄の病気を専門に診療しています。院名の通り手術に力を入れており、2022年は1年間で延べ845件を実施。同年に医師が2人加入して5人体制になったことにより、2023年に入ってから延べ件数はこれまでより多い月間90前後で推移しています。患者さんの体の負担が少ない、体の側面から切開する「XLIF（エックスリフ）」という手術方法を得意としており、この術式の実施件数は全国でも上位に位置しています。

手術実績を上げられている理由の一つに、病診連携がうまくいっていることが挙げられます。リハビリ医療に注力する「竹口病院」（昭島市）と協力関係にあり、同院が術後の患者さんを速やかに受け入れてくれるんですね。加えて、手術経験が豊富な和田圭司院長の加入も影響しています。

—和田先生は2022年4月に就職したそうですね。

和田 はい。それまで東京女子医科大学病院に20年以上勤めましたが、50歳の節目を迎えるに当たり、「もっと診療に集中したい」と新しい勤務先を探していました。縁あって知ったのが、八王子脊椎外科クリニックでした。こちらは脊椎外科に特化しており、私がこれまでに行ってきた手術経験を生かせるうえ、設備にも魅力を感じました。

クリニックにある「O-arm（オーアーム）」は、手術中にCTのような3D画像を撮影できる可動式の機器です。これを使った「O-armナビゲーションシステム」を活用することで、病変などを3次元で確認できるため、手術の精度や安全性を高められます。私は同大で10年ほどこのシステムを活用して手術を行ってきましたが、現在、保有する医療機関は全国でも少ない状況です。「診療に集中しつつ、先端的な治療も行えるだろう」と加入しました。

—ホームページによると、医療法人社団博豊会は2023年9月に病院を開院するといいます。概要は。

森 東京都足立区の環状7号線沿い（足立区一ツ家1-1-1）に「東京脊椎病院」を開院します。敷地面積2288平方メートル、延べ床面積4340平方メートルの5階建てで、病床を78床、手術室を3室備えます。O-armの保有などクリニックの特徴も引き継ぎます。

開院当初のスタッフ数は約100人を予定しており、医師や看護師、事務のほか、薬剤師、診療放射線技師、臨床検査技師、理学療法士、作業療法士、臨床工学技士、管理栄養士、社会福祉士、看護補助——といった多職種が在籍するようにしたいと考えています。開院時の常勤医は私を含めて3、4人を想定しています。



東京脊椎病院の外観イメージ（法人提供）

—資料によると、和田先生は森先生に代わり、2022年9月にクリニックの院長に就任しました。森先生は東京脊椎病院の院長を務めるとあります。

森 ちょうど良いタイミングの出会いに恵まれました。和田先生はO-armを使った低侵襲の手術にたけるほか、海外での論文発表など学術的な実績もあります。院長職を務めるうえでは人柄も問われますが、和田先生が当院に加入して以降、患者さんやスタッフへの接し方を見るにつれてその面での魅力も感じ、院長の就任を打診しました。

—東京脊椎病院では78床のうち、HCUが4床、回復期リハビリテーションが23床を占めます。回復期リハの多さが特徴だと思いました。

森 これは、病院をつくらうと考えた経緯が関わります。開院して6年ほど経ったころ、スタッフ体制が安定し、手術件数も年間600件を超えるようになったことでクリニックが手狭に感じるようになりました。先述の通り病診連携はうまくいっていたものの、患者さんによってはもう少し当院でリハビリを行ってからご自宅に戻っていただいた方がよい、術後の生活様式をしっかりと身に付けたうえで退院してもらった方がよいだろうと思うケースが増えてきたのです。

例えば、当院では加齢に伴って背骨が変形する成人脊柱変形の手術を多く行っていますが、この手術では術後に得られやすいことと失いやすいことの両方があります。姿勢のバランスを正して動きやすくできる一方、前屈の動作に制限がかかってしまうことがあるのです。事前にこうした可能性は説明しますが、患者さんからすると実際にその状態になってみないと対応しづらいもの。現在はその動作に慣れていく途中で退院することがあるんですね。

—回復期リハを多く設けるのは、「入院中のサポートを厚くしたい」思いあつてのことなのですね。

森 高齢化の進展によって脊椎疾患の患者さんは増えていますが、受け皿は足りていません。脊椎外科に特化したクリニックや病院は都内でも数えるほどで、需要に供給が追いついていない状況です。それは、この分野の医師として一人前になるまで最短でも10年ほどはかかるという、育成期間の長さも関係しています。都内に病院をつくることで医療の課題に貢献しつつ、医師の教育にも携わりたいと考えています。

◆森 俊一（もり・しゅんいち）氏

1993年愛媛大学医学部卒。帝京大学医学部附属溝口病院や鎌ヶ谷総合病院脳神経外科脊椎センターセンター長などを経て、2013年に八王子脊椎外科クリニックを開院。2023年9月に開院する東京脊椎病院の院長に就任予定。

◆和田 圭司（わだ・けいじ）氏

1998年島根大学医学部卒。2011年東京女子医科大学整形外科講師、2018年同大准教授などを経て、2022年4月に八王子脊椎外科クリニックに加入。同年9月に院長就任。

【取材・文・撮影＝医療ライター 庄部勇太】

